

情報教育における効果的な情報伝達に関する一考察

—知識階層と伝達手法の視点から—

木川明彦^{*1}

Email: akihiko913@yahoo.co.jp

*1: 立正大学 非常勤講師

©Key Words NLP VAK 知識の階層化 当事者意識

1. はじめに

教育現場における伝達手法に関する報告は以前から多く存在する。近年ではアクティブラーニングや反転学習などの分野で様々な研究報告がなされている。しかし、伝わり方に関する研究報告は少ない。私自身、教壇に立ち、学生に講義をしているとその意図が通じているのかと考えることがしばしばある。実際、普段から教員が考えていることをそのまま大学生に伝えても十分に理解されることはない。普段から教員は、それをかみ砕いて大学生に伝えるということをしていると感じられる。もとより各分野における効果的な情報伝達とは、その学習者の特性を見極め、一番適したものを選択すればよい。従って、本稿で画一的な手法を考案しようということではない。しかし、漠然としている事に対し、明確な区分ができれば授業環境はより良いものとなる。

本稿では、知識のレベルを区分し、伝わり方の違いを調査する。最終的には、アンケート調査を実施し、そのことから最適と考えられる情報伝達の手法を考察する。

2. 基本的な視座

本章では、本稿の基本的視座について述べる。具体的にはアンケートを実施するまでの着想プロセスに関して示す。

2.1 知識のレベル

まず、「学習の5段階レベル」である。学習の5段階レベルは、Neuro Linguistic Programming：神経言語プログラミング(以下、NLP)の用語であり、下記のようにまとめられる。(表1)そもそも、NLPは1970年代半ばに考案され、心理療法の一つとして確立されている。これらの処理は、視覚・聴覚・身体感覚のいずれかを優位に認知されるものだとしている。また、従って、NLPは様々な感覚、イメージや感情を付帯したものとなっている。

(表1)学習の5段階レベルの概要

・第1段階：無意識的無能	あることに関して何も知らず、知らないということさえ知らない状態。
・第2段階：意識的無能	あることに関して知識としては知っているが、実際に行うことは出来ない状態。
・第3段階：意識的有能	あることに関して意識しながらなら出来るが、集中していないと出来ない状態。
・第4段階：無意識的有能	あることに関して意識しなくても自動的に実施することが出来る状態。
・第5段階：無意識的有能に意識的有能	考えなくても出来てそれを意識することが出来る状態。

2.2 VAKの着想

NLPにおいて五感(視覚・聴覚・身体感覚)は代表システムと捉えられる。V(visual)、A(auditory)、K(kinesthetic)=体感と表現される。人間は、これらの感覚を通して外からの情報や刺激を受け取るとされ、その受容性には個体差があるのは当然のことである。また、図1に示した通り、外部情報は経験として取り込まれ、意識感によって理解・解釈される。つまり、同じ知識を有していても、受取手によってその理解度は変わってくることを示している。



図1 千葉によるメタ認知モデル

¹ 千葉 英介：“心”を理解し、ビジネスに活かせ! NLP理論入門” 24pより引用・編集

2.3 知識のレベル分け

では、我々が有している知識とは何であるか、研究者であれば研究から得られた知見が研究知として扱われる。また、実務家であれば、それは実務知として扱われるし、学習者であれば学習知が確立される。具体的には、情報セキュリティの講義などで、当事者意識を抱いているのかということ疑問を抱くことがある。つまり、事実として知っていることと体験していることでは大きなかき離があるということである。

2.4 小括

上記で示したように、人の反応はその者の習熟度や経験によって異なる事を整理してきた。また、その個体差によっても受け取り方が異なることを整理してきた。

従って、我々が普段から提示している情報も、この区分からすれば、展開可能性があるように感じられる。

3. 伝達手法に関する考察

本章では伝達手法に関する考察を行う。伝達手法は伝達ツールと伝達手法に分けられる。伝達ツールとは、一般的に口頭、マルチメディア、模擬ゲーム、等が考えられる。一方、ここでの伝達手法とは、話し方の技法であり、人称の違いや繰り返しなどを指す。これらは、伝達者側の分類であり、前章の受取側の分類と異なる。

4. アンケートの実施と内容

本研究では、上記の知見をもとにアンケート調査を実施する旨記載する。その対象を情報処理科目の履修者において実施することを示しておく²。

4.1 アンケートの内容

学生らが受講する講義内容は基より、その対象を広く捉え、下記の項目に沿ってアンケートを作成・実施する。

1. コンピュータシステムに関すること
2. 情報セキュリティに関すること
3. マネジメントに関すること
4. ストラテジに関すること
5. 情報と法務に関すること

詳しくは、発表大会で補足させていただきたい。また上記で示してきたレベル分けにそって、研究報告をしたいと考える。

5. おわりに

本稿では、整理できていない部分が多々あり、細かい分析、説明は大会で補わせていただきたいと考える。また、今回の予稿原稿をもって、調査結果を掲載できなかったことは私自身の研究不足を反省するところである。今後も研究課題として、本稿を進めるものとする。若年層のコンピュータ離れにも問題意識があり、こうした研究が活かされれば幸いである。

今後も微力ながら、情報教育に関する研究に一石を投じていきたいと考える所存である。

参考文献

- (1) 位田 達哉, 位田 幸子: “学習者特性に合わせた建築材料施工教育の試み(第1報)心の情報処理傾向の現状調査および考察”, 研究報告 29 号,p99-102,第一工業大学(2017)
- (2) 千葉 英介: ““心”を理解し、ビジネスに活かせ! NLP 理論入門”, Business risk management22 巻1 号,p.22~27, ビジネス・エデュケーション・センター(2007)
- (3) 直井みずほ: “図解でわかる!NLP” 秀和システム(2017)
- (4) リチャード・バンドラー(酒井一夫 訳) “神経言語プログラミング = Neuro-Linguistic Programming: 頭脳をつかえば自分も変わる(新装版)” 東京図書(2019)

² 予稿原稿にアンケート調査の掲載が間に合わなかったため、大会で予備資料を用いて、補足する。